

# 大東亞戦争革命論関連ブックリスト（精選33）

〔編・解題〕 千坂恭二・前田年昭

二〇〇九年二月二十八日

『悍』創刊記念JUNK連続トークセッション

東京・ジュンク堂書店池袋本店

近代日本におけるアジア主義の思想や第二次世界大戦のアジア・太平洋地域戦すなわち大東亜戦争についての戦後の評価は基本的には否定的なものであった。アジア主義は日本のアジア侵略の尖兵となるイデオロギーであり、大東亜戦争は侵略とされてきた。これに対して保守右派は周知のように大東亜戦争について、それは日本の民族防衛戦であり、日本は無罪であると反論してきた。しかし、ではそれが民族防衛戦ならば積極的なアジアへの攻撃的進攻はどのように位置づけられるのか。

近代における東アジアの小国の日本の勃興と大東亜戦争はそれまでの欧米中心の人類の世界像を根底から覆す出来事だったといえる。なぜなら当時はアジア・アフリカのほとんどは欧米の植民地だったからであり、いくつかの独立国でさえ、いわば地球の片隅で独立を許されていたと言っても過言ではない状態だったからである。その中で日本はアジアの独立国家というにとどまらず、その存在そのものにおいて欧米の植民地支配とは相容れないアジア解放の革命国家という性格を有していた。それゆえアジア・アフリカの人々は真珠湾奇襲攻撃に希望を見たといえる。アメリカが真珠湾奇襲攻撃に対して、その「奇襲」性を騙し討ちと矮小化し、その歴史的意義を否定するのは、日本の戦争がアメリカ国内の黒人解放運動などと連動することを恐れたからだという推察も可能だろう。

アジア主義や大東亜戦争が何だったのか。歴史の評価は、事実の集積によって成り立つのではない。人間が、身体の全器官の総合であるのではなく、それ以上の何かであるように、歴史もまた事実の集積以上の何かなのであり、その何かを解く作業は、これから始まるというべきだろう。

以下は、近代日本が何であったのかを解くための、絶版や品切れを除き、現在入手可能なものから選んだささやかなブックリストです。〔千坂〕

●頭山満、犬養毅、杉山茂丸、内田良平『アジア主義者たちの声 上 玄洋社と黒龍会、

あるいは行動的アジア主義の原点』書肆心水、二〇〇八・三

●宮崎滔天、萱野長知、北一輝『アジア主義者たちの声 中 革命評論社、あるいは中国

革命への関与と蹉跌』書肆心水、二〇〇八・三

●北一輝、大川周明、満川亀太郎『アジア主義者たちの声 下 猶存社と行地社、あるいは

は国家改造への試み』書肆心水、二〇〇八・三

……大川周明は、北一輝の歴史観を「北君は、大西郷の西南の変を以て一個の反動  
なりとする一般史学者とは全く反対に、これを以て維新革命の逆転又は不徹底  
に対する第二革命とした」ととらえ、たたえた。(前田)

●大川周明『頭山満と近代日本』春風社、二〇〇七・一二(中島岳志編)

●大川周明『日本二千六百年史』毎日ワNZ、二〇〇八・一〇

●大川周明『復興亜細亜の諸問題』中公文庫、一九九三・三

●井川聡、小林寛『人ありて 頭山満と玄洋社』海鳥社、二〇〇三・六

●満川亀太郎『奪われたるアジア 歴史的地域研究と思想的批評』書肆心水、二〇〇七・四

●三木清『三木清 東亜協同体論集』こぶし書房、二〇〇七・四

●綱沢満昭『農の思想と日本近代』風媒社、二〇〇四・八

●栄沢幸二『大東亜共栄圏』の思想』講談社現代新書、一九九五・一一一

●伊藤隆『近衛新体制 大政翼賛会への道』中公新書、一九八三・一一一

……近衛新体制運動が目指したものは日本に一国一党的な体制を形成することであり、それは日本におけるファシズム体制確立の運動といわれている。しかし新体制運動は様々な利害の交錯や紆余曲折を重ね、さらに国粹右翼から「幕府」構想であると批判されて事実上頓挫し、行き着いたところは大政翼賛会にすぎなかった。「大日本党」的一党体制としての新体制運動頓挫の足取りを検証する。〔千坂〕

●河上徹太郎ほか『近代の超克』富山房百科文庫、一九七九・二一

……座談会「近代の超克」（一九四二年）および関係者の論文のほか竹内好「近代の超克」を収める（解題・松本健一）。〔前田〕

●廣松渉『〈近代の超克〉論 昭和思想史への一視角』講談社学術文庫、一九八九・一一一

……後に論文「東北アジアが歴史の主役に」で「東亜の新秩序」の思想の左翼的奮還を主張するにいたる廣松による日本近代思想史研究（解説・柄谷行人）。〔前田〕

●橋川文三『日本の百年 4 明治の栄光』ちくま学芸文庫、二〇〇七・一一一

●橋川文三『日本の百年 7 アジア解放の夢』ちくま学芸文庫、二〇〇八・四

……東北農村の大凶作、昭和維新の嵐のなか不安と退廃に澱んでいた一九三〇年代の日本を体験談、新聞雑誌、回想録、流行歌にいたるまで多方面から取材し、時代を写し出した記録現代史。〔前田〕

●橋川文三『昭和ナシヨナリズムの諸相』名古屋大学出版会、一九九四・六

……ナシヨナリズム研究は「戦後」という枠組みから逸脱せぬようにとタブー化されてきた。橋川はこれに屈することなく、日本におけるネーションの探究とナシヨナリズム研究に取り組んだ。〔前田〕

●宮崎滔天『三十三年の夢』岩波文庫、一九九三・五

●上村希美雄『龍のごとく 宮崎滔天伝』葦書房、二〇〇一・七

……「トウテンメイケイ（盟兄）ノシヲカナシム」との孫文からの弔電が示すようにアジア革命に生きた大夢想家にして大反逆者宮崎滔天の伝記。著者自身の労作『宮崎兄弟伝』（前五冊）のコンパクト版。〔前田〕

●安彦良和『虹色のトロツキー 一〜八巻』中公文庫、二〇〇〇・三―二〇〇〇・九

●佐藤哲朗『大アジア思想活劇 仏教が結んだ、もうひとつの近代史』サンガ、二〇〇八・九

●中島岳志『中村屋のボース インド独立運動と近代日本のアジア主義』白水社、二〇〇〇

●丸山静雄『インド国民軍 もう一つの太平洋戦争』岩波新書、一九八五・九

……イギリス植民地下のインドにおける独立運動にはガンディーらの非暴力路線と、チャンドラ・ボースらの武装闘争路線があった。ボースらの武装路線は、日独の枢軸を味方としてイギリスに対する独立闘争を展開した。ボースを最高司令官として日本軍と共に「自由インド」をスローガンに闘ったインド国民軍の横顔。〔千坂〕

●竹内好『竹内好セレクション 1 日本への／からのまなざし』日本経済評論社、二〇〇七・五／二〇〇六・一二（はじめに・丸川哲史、解説・孫歌）

●竹内好『竹内好セレクション 2 アジアへの／からのまなざし』日本経済評論社、二〇〇七・五／二〇〇六・一二（はじめに・鈴木将久、解説・松永正義）

●竹内好『日本とアジア』ちくま学芸文庫、一九九三・一一

……竹内好の「侵略」と「連帯」を具体的状況において区別できるかどうかが大問題」との指摘をオヤツと思いつながら無視するなどという思考停止や、アジア主義から連帯をとり出し侵略をとり除こうという後知恵が絶えないのは、思想をファクションとしてしかとらえていないからではないだろうか。〔前田〕

●相良俊輔『あゝ厚木航空隊 あるサムライの殉国』光人社NF文庫、一九九三・八

……小園安名——厚木航空隊司令として無条件降伏に反対して徹底抗戦を主張したために、四五年八月二一日、横須賀野比海軍病院（現久里浜アルコール症センター）に強制入院、同年一〇月一六日、臨時軍法会議で「無期禁錮刑」、以後五年服役——は大東亜戦争に殉じたがゆえに「戦後」によつて隠蔽された。（前田）

●蓮田善明、伊東静雄『蓮田善明／伊東静雄 近代浪漫派文庫』新学社、二〇〇五・三

●保田與重郎『保田與重郎文庫 28 絶対平和論／明治維新とアジアの革命』新学社、二〇〇二・七

●渡辺京二『渡辺京二評論集成 1 日本近代の逆説』葦書房、一九九九・八

●山室信一『思想課題としてのアジア』岩波書店、二〇〇一・一二

●米谷匡史『アジア／日本 思考のフロンティア』岩波書店、二〇〇六・一一

●J・ハーフ（中村幹雄他訳）『保守革命とモダニズム』岩波書店、一九九一・三

……啓蒙的理性を拒否しつつも反近代になるのではなく、もう一つの反啓蒙的な近代はどのようにして可能になるのか。ワイマール戦間期ドイツの保守革命思想からナチス時代における反西欧的な近代化の思想と運動を「反動的モダニズム」という著者独自の概念により解き明かす。（千坂）

二〇〇九年二月二八日印刷発行

『悍』編集委員会

編集人・前田年昭 t-mae@inelabo.com